

平成 24 年度 教職員の自己評価集計結果とその考察（一学期分）

藤 幼稚園

A：よく出来ている、B：まあまあ出来ている、C：あまり出来ていない、D：出来ていない

I 保育の計画性

A評価 B評価 C評価 D評価

		A評価	B評価	C評価	D評価
園の教育方針等の理解	園の教育方針や教育目標を理解する	13%	60%	27%	0%
教育課程の編成	園の教育課程を理解し、それに基づいて保育の計画を立てる	8	69	15	8
指導計画の作成	指導計画は幼児の発達に即して幼児期にふさわしい生活を展開できるように具体的に作成する	0	83	17	0
環境の構成	幼児が主体的に関わりたくなるような素材や遊具を考へて環境を構成する	0	79	21	0
	幼児が自ら活動を展開していけるような場や空間の構成をする	0	64	36	0
	楽しい雰囲気の中で安心して遊びこめる環境を構成する	0	79	21	0
	幼児の発達や生活を見通した環境の構成をする	0	71	29	0
評価・反省	自分の保育を評価・反省することで、次の保育に生かす	7	60	33	0

「園の教育方針等の理解」の項目では、「よく出来ている」（以下、「A評価」という。）と「まあまあ出来ている」（以下、「B評価」という。）を合わせて73%となっている。また、「教育課程の編成」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて77%、また、「指導計画の作成」の項目では、「B評価」のみで83%であり、おおむね園の教育方針や教育目標を理解した上で指導計画を立てていると思われる。

また、「環境の構成」の項目では、幼児の主体性や発達を考慮して保育環境を構成していると自己評価した者は、「B評価」のみで平均70%以上であった。ただ、幼児が自ら活動を展開していける環境や幼児の発達や生活を見通した保育環境の構成に課題を持っている者も30%前後おり、今後も努力を重ねていく必要があると考える。

「評価・反省」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて67%であり、自己の保育を見直すことで次を保育に生かそうとしていることが窺える一方で、次の保育に生かし切れていない者も1/3を占めている。

II 保育のあり方、幼児への対応について

健康と安全への配慮	園内に危険な箇所がないか、危険な遊び方はしていないか常に配慮し、危険が予測される時は安全な遊び方について幼児と一緒に考える	33%	60%	7%	0%
	園内の清掃や整理整頓、換気、採光、室温などに気を配る	27	67	6	0
幼児理解	個々の幼児の発達の姿や課題について、見通しをもって理解する	13	60	27	0
	幼児同士の関わりの姿を捉え、そこでの幼児の育ちを理解する	6	67	27	0
	幼児の理解のために家庭との連携をとる	15	62	23	0
指導との関わり	幼児の思いや考えに共感しながら、幼児と一緒に活動する	13	80	7	0

	幼児の話をよく聞いたり、スキンシップをとるようにする	27	67	6	0
	幼児が自ら考えたり工夫したりできるように見守り、行き詰まっているときには適切な援助をする	13	74	13	0
	幼児同士のトラブルに対し、適切な対応をするように心がける	6	74	20	0
保育者同士の協力・連携	クラスに関係なく、その場にいた保育者が適切な言葉がけや対応をするように心がける	0	87	13	0
	幼児のことについて保育者同士で話し合い、共通理解を図る	40	33	27	0

「健康と安全への配慮」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて93%にも上り、「健康と安全への取組み」が教職員の意識にもかなり浸透していることが窺える。また、「幼児理解」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて約75%であり、教職員は幼児理解の重要性を感じて努力しているものと思われる。

また、「指導との関わり」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて平均90%近くであり、幼児への関わりを重視しながら保育に当たっていることが窺える。中でも、幼児間のトラブルへの対応は、20%の者が「あまり出来ていない」（以下、「C評価」という。）としており、指導の難しさが読み取れる。

「保育者同士の協力・連携」の項目では、「クラスに関係なく、その場にいた保育者が適切な言葉がけや対応をするように心がけているか」の問いに「B評価」とした者は87%であり、全園児を大切にしながら保育に当たっていることが窺える。また、「幼児について保育者同士で話し合い、共通理解を図っているか」の問いに「A評価」が40%、「B評価」が33%であり、協力・連携体制があると自己評価した者が73%である一方で、27%の者が「C評価」しており、教職員の協力・連携体制への捉え方に差があるように思われる。

III 保護者への対応について

情報の発信と受信	保護者からの相談や要望には心を開いて、よく話を聞くように心がける	20%	60%	20%	0%
対応上の心がまえ	保護者からの依頼や伝言などについては、メモをするなどきちんと対応する	7	80	13	0
クレームへの処理の仕方	クレームの内容によっては教職員全体で検討し、共通理解の上で対処する	23	54	23	0

「情報の発信と受信」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて80%にも上り、保護者からの相談や要望には心を開いてよく話を聞くよう心がけている一方、「C評価」した20%の者は十分でないと考えている。また、「対応上の心がまえ」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて87%であり、保護者からの依頼や伝言にはきちんと対応するように心がけていることが窺える。さらに「クレームへの処理の仕方」の項目では、「A評価」が23%、「B評価」が54%であり、クレームへの内容によっては教職員全体で検討し、共通理解した上で対処していることが窺える一方で、「C評価」した23%の者は、個人の問題で留めている。

IV 地域や自然や社会との関わり

地域・自然・人々との関わり	地域の自然や主な施設の場所、交通機関、行事などについて理解するよう努める	0%	43%	50%	7%
---------------	--------------------------------------	----	-----	-----	----

小学校との連携	地域の小学校の行事や公開授業に参加するよう努める	0	31	15	54
子育て支援と地域への開放	子育ての支援や地域への開放に努めている	0	15	46	39

「地域・自然・人々との関わり」の項目では、「B評価」が43%に対して、「あまり出来ていない」と「出来ていない」を合わせて57%にも上り、地域等の関わりに課題を感じている教職員が多いことが窺える。また、「小学校との連携」の項目では、「B評価」とした者は31%と低く、逆に「C評価」、「D評価」と答えた者は合わせて70%近くに上り、小学校との連携は十分でないことが窺える。

「子育て支援と地域への開放」の項目では、「B評価」とした者は15%しかなく、逆に「C評価」、「D評価」と答えた者は合わせて85%にも上り、子育て支援や地域への園開放が今後の課題であることが窺える。

V 研修と研究について

研修・研究への意欲・態度	研修会や研究会には自己の課題をもって参加する	0%	75%	25%	0%
	自分の保育のあり方や悩みについて、他の保育者や主任、園長に相談する	14	64	22	0
今日的課題に関する研修・研究 (複数回答可)	障がいのある幼児の理解と対応について研修する	0	40	40	20
	預かり保育や子育ての支援について研修する	0	30	40	30
	幼小連携の必要性や具体策について研修する	0	22	45	33
	危機管理の必要性と対応について研修する	0	44	56	0

「研修・研究への意欲・態度」の項目では、「研修会や研究会には自己の課題をもって参加しているか」の問いに「B評価」した者が75%であり、また、「自分の保育のあり方や悩みについて、他の保育者や主任、園長に相談しているか」の問いには「A評価」と「B評価」を合わせて78%であり、おおむね職場内での相談できる雰囲気は醸成されつつあるように思われる。ただ、「C評価」した者も25%おり、今後も研修会や研究会への機会の設定、教職員間の相談体制の充実に努める必要がある。

また、「今日的課題に関する研修・研究」の項目では、全体として、十分でないと感じている者が多い。中でも、「預かり保育や子育て支援についての研修」では、「C評価（あまり出来ていない）」と「D評価（出来ていない）」を合わせて70%にも上り、「幼小連携の必要性や具体策についての研修」でも「C評価」と「D評価」を合わせて78%にも上っており、預かり保育や子育て支援、幼小連携の研修・研究が十分でないと感じている者が多いことが窺える。

【全体の考察】

全体として、保育の計画性については十分とはいえないものの、おおむね園の教育方針や教育目標を理解した上で、子どもの発達状況や主体性を重視しながら日々保育に当たっており、保育のあり方や幼児への対応については、課題はあるものの職場内で話し合ったりして共通理解を深め適切に行うよう努めており、保護者への対応では、教職員全体で話し合い、共通理解をした上で対処するよう努めていることが窺える。

地域や自然や社会との関わりでは、小学校との連携、子育て支援や園開放が大きな課題と捉えている教職員が多く、研修や研究については、自己の課題をもって参加したり、保育のあり方や悩みを職場内で相談する体制はおおむね整っているものの、「幼小連携」や「預かり保育」、「子育て支援」の研修や研究は十分でないと感じている教職員が多い。